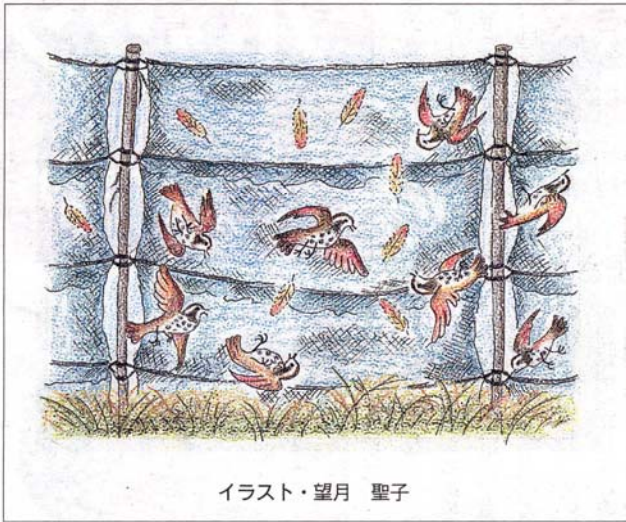


おもしろノート

多摩の野鳥たち 4

国松 俊英



イラスト・望月 聖子

ツグミは全長24センチ、ムクドリくらいの大きさの鳥です。体の上面は褐色で、翼の羽は全体が赤茶色をしています。胸から脇腹にかけて黒い斑点があり、目の上の白いまゆが特徴です。畑や芝生、川原など開けた地面を、両足をそろえて「ピョンピョン」跳ねるように歩きます。数歩あるいては立ち止まり、胸をさらせる習性があります。庭に作った餌台にもよってきます。

冬鳥で、10月から11月頃に群れて日本に渡ってきます。繁殖するのは、カムチャツカやシベリア東部です。カラスザンショウ、ハゼノキ、イイギリなど木の実を好んで食べます。虫やミミズも好きです。渡ってきた頃は群れて生活しますが、冬に入ると群れは分散します。

ツグミ



田中忠義さん撮影

ツグミとは「噤(つぐみ)」のことです。この鳥のなかまは、夏全のあと鳴かなくなり、口をつぐんでしまふのでこの呼ばれました。跳ねるような歩き方から「鳥馬(ちようま)」という名前もあります。

ツグミは小鳥の代表といわれ、おいしい食材として古い時代からずっと食べられてきました。この鳥を大量に捕らえるようになったのは、江戸時代の加賀藩です。北陸地方は、ツグミ、カシラカなどの冬鳥の大部分が

カスミ網獵、一時は年数百万羽

日本海を越えて渡ってくるルートにあたっていきます。

加賀藩の武士は、ツグミを網打尽に捕らえるためにいろいろと考えました。そして細い絹糸を使って網を編み、「天網(てんあみ)」というものを作り出しました。この網は、飛んでくるツグミには網が見えませんが、天網が現在のカスミ網の原形となりました。

加賀藩では武士たちに、カスミ網の猟を遊芸のひとつとしてやらせたようです。表向きは遊びでしたが、真のねらいは武士の足腰を鍛えるためのものでした。武士が天網を張るために山

林を拜領したいと願い出ると、加賀・能登・越中の国のどこにでも約800以上の場所が山の中に与えられたといえます。

さいしよは山中での宿泊は許されなかったようですが、武士に規則はゆるんでいき、武士たちは山中に小屋を建ててカスミ網を張り、ツグミを捕らえるようになりました。はじめ武士の鍛錬が目的だったのに、しだいに遊びと野鳥料理を楽しむものになっていったのです。

明治維新になると、それまで武家に雇われカスミ網獵で働いていた人たちが経営者になっていきました。カスミ網獵は、石川県から富山県へ伝わり、岐阜

県から愛知県、長野県、福井県へと広がっていききました。

山の中に行つてツグミ料理を食べる人はふえ、中部地方でのカスミ網獵はさかんなものになっていきました。ツグミ料理は

美味とされ、丸焼きにするほか、治部煮、粕漬、こうじ漬、すき焼きなど、いろんな料理方法で食べられました。

太平洋戦争が終わってすぐの1947(昭和22)年にカスミ網獵は禁止されました。それにもかかわらず、ツグミの密獵は公然と行われました。中部地方では、ツグミなどの野鳥を食べる風習は残り、山中に作られた鳥屋(とや)は繁盛したのです。

そのため、カスミ網を使って捕らえられるツグミの数は、毎年、数百万羽にものぼったのです。秋になって鳥屋が仕事をはじめても、警察などは見て見ぬふりをしました。こうして中部地方の山間部では、長い間カスミ網を使ってのツグミ獵が続けられました。けれど日本野鳥の会の会員など、体を張ってカスミ網獵を根絶するために戦った人がいました。そのおかげで、警察の取り締まりも厳しくなり、いまでは山中でのカスミ網獵はほとんどなくなりました。

後絶たぬカスミ網密獵

カスミ網は、ふつうテラスなど目に見えないほどの細い糸で編まれ、小鳥を捕らえるために作られたものです。長さは2メートルで、幅は1.5センチです。細い竹材を支柱にして開いて張ります(イラスト参照)。

カスミ網は47年の使用禁止後、91年には販売や捕獲目的のために持つことも禁止となりました。しかし現在でも、メジロを籠(かご)で飼いたいとか、ツグミやスズメを捕らえて焼き鳥にして食べたいという人がいて、カスミ網を使った密獵は後を絶ちません。環境省や日本野鳥の会では、もし登山やハイキングで山を歩いている時に、カスミ網を見つけたらすぐに知らせしてほしいといっています。